
エンジェル・フィールド

広河陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェル・フィールド

【Nコード】

N0335X

【作者名】

広河陽

【あらすじ】

遠い所に旅立つ異性の友人に、最後に贈る言葉は「
」。
恋愛に限りなく近い、男女の絆を描いた切ない物語。
舞台は近未来の宇宙コロニー、SF的設定を散りばめています。

自身のサイト「ふみかばんのほーむ」より転載したものです。

episode 1

情報端末のキーを叩いていたハルジは、モニター右上の時刻表示パソコンに目をやると、TVフォンの通話ユニットを手元に引き寄せた。それをきっかけにモニターから視線を外し、軽く右肩を回す。

やりかけの仕事は目処がついた。話を早めに切り上げれば、睡眠時間も朝食も削らなくて済むだろう。

左肩もマッサージしようとする、TVフォンの呼び出し音が鳴った。

ハルジは間髪入れずに通話ユニットを取り上げた。

通常、フォンに切り替わって相手を映し出すはずのモニターには変化が起こらない。迷惑フォンの可能性をちらりと思いつかべながら、ハルジはユニットに慎重に呼びかけた。

「……もしもし」

「あ、ハル？ ごめん、こんな夜遅くに。時間の割にはフォンに出るの、早いね。仕事でもしてた？」

「……まあね」

聞き覚えのある声に安堵する反面、その声が予定より高めの声だったので、ハルジは軽い失望を隠してそう応えるのがやっとだった。彼女がハルジにフォンをかけてくる時は、厄介事を抱えている時としても過言ではない。厄介事の込み入り具合に比例して、通話ユニットを持っている時間も長くなる。その面倒が嫌ではなかったが、他にフォンを待っている時ぐらいは避けたい相手だった。

とは言え、相手は若くて美しい女性だしその上、自分にとってかけがえのない人でもある。嬉しさが湧いてこない筈はない。

一面に無機質な文字の連なりを映すモニターに、ハルジは彼女の華やいだ笑顔を思いの中で投影する。挨拶の言葉が口について出た。「サンドラは元気？ 研究所勤務って結構ハードだって、聞いたけど」

聞きたい事はあったが、一ヶ月ぶりのフォンだったのでハルジはまず近況を訊ねる。サンドラは、先程のハルジを真似して答えを返してきた。

「まあね。でもほら、自分で選んだ道だし。後悔はしてないよー」
サンドラが語尾を伸ばすのは、甘えではなく機嫌が良い証拠だ。

「よかった、よかった」

「ハルは？ カレリアさんとはうまくいってる？」

カレリアとは、ハルジがフォンを待っている相手の名である。

「それなりに。サンドラは？」

ハルジはさりげなく訊いたつもりだったが、何処かに緊張した響きがあったのだろう。それを耳聴く感じ取ったサンドラは、意味深ながらも明るい含み笑いをして続ける。

「私の事なんか心配しないでよ。磯崎さんはあの通り、素敵な人ですから」

「……はいはい」

昔はこんなちよつとしたおのろけもうらやましくて少し辛かったが、今は苦笑と共に受け流せる余裕があった。

しばらくは当たり障りのない世間話が続くだろう。が、これまでの経験からハルジは知っていた。サンドラがこんな映像オフのフォンをしてくる時には、特に重い悩みがある。きっと、悩んで泣き腫らしたか何かした後で、努めて明るい声で話しているのだ。

世間話が途切れ、通話ユニットの向こうでサンドラが息を飲むのがハルジに感じられた。次の瞬間、彼女は絞り出すような声で苦しうに言った。

「あたし、磯崎さんとは一緒になれない……」

枚方ハルジひじかたとサンドラ・フィオルが研究生として分子遺伝学ラボに配属になったのは、4年前の秋だった。

ハルジはごく普通にスクールで学んだので20歳だったが、サンドラは飛び級制をフル活用していたので15歳だった。

そんな努力家が（天才、ではない。もし天才ならば論文によって、6歳以上であればラボ入りできる特別処置が適応される）分子遺伝学ラボに配属されるのは5年ぶりだったので、サンドラはちょっとした有名人になっていた。

それも女性（というよりは少女だった）ということ、ラボの研究生や研究員はこぞって事前にデータをとり寄せており、サンドラの顔は知られていた。

そんな理由から、サンドラはラボ配属の顔合わせの時から15歳の少女として周りから扱われたのである。が、それは彼女が望まないことだった。彼女を同列の大人として扱ったのはハルジだけでサンドラはそこに、いたく感銘を受けた。

しかしながら、それはハルジがサンドラの真意を読み取っていたからではない。ハルジはあまり他人に興味を持たない質で、下調べを怠ったのである。

サンドラは上背があり、まどついている雰囲気が大人数びいたので、下調べなどしなければ20歳の女性として充分通じる。普通ならば大変な失礼に当たったであろうことがこの場合は功を奏したのだ。

ハルジがサンドラの年齢を知ったのは、出会ってから一週間ほど後だった。最初はハルジも接し方を変えようかと考えたが、今さら態度を変えるのに不誠実さを覚えたのと、何よりもサンドラがそれを望んでいなかったので実行しなかった。

そして、その事情をサンドラに話しても彼女の感銘は色褪せなかったのである。

ハルジは、サンドラ・フィオルをサンドラと呼んだ。同姓が多いなど仕方ない状況以外では、ごく親しい人しかファースト・ネームを口にしない傾向が強い東洋人^{エイジャン}のハルジにとって、これは珍しいことだった。

しかし、サンドラの愛称の“サンディ”は口にしなかった。

愛称を呼ぶのは本来は親しみを表す方法であるが、サンドラにとっては彼女のプライドを傷つけることだと、ハルジは直感したのだ。

サンドラは太洋州人オセアニア人の常として彼の姓でなく名を呼び、友人として愛称の“ハル”を呼ぶ。

が、サンドラが愛称を呼ぶのはこのラボではハルジしかないなかった。

わざわざ東洋人、太洋州人という単語を持ち出したのには訳がある。最近ではだいたい混じり合ってきたが、ここの文化はこの二つに大別されるからだ。

極東の島国、日本に端を発する東洋人。

太平洋の南半球に浮かぶ大陸オーストラリアを起源とする太洋州人。

おおよそ東洋人6に対し太洋州人1の割合で人々が暮らすここは、月と地球の間にある重力均衡宙域に浮かぶ5つの衛星都市の一つ、グラウクス。

30年前、日本とオーストラリアを同時に襲った「隕石の災厄」、隕石が撒き散らしたウイルス、メテオリック・カラミティ(=MC)は多くの人命を奪った。だが、致死率98%のMCの洗礼を免れることができた人々が約400万人いた。彼らはMCをそれ以上広げないようにするため、衛星都市という名の牢獄に入る運命を自ら受け入れた。その彼らがハルジやサンドラたちの親以上の世代に当たる。

第2世代が台頭し始め二つの民族は融合してきたが、この区別はまだ無意味ではない。

episode 1 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月16日です。

ハルジが、映像を切った音声限定のTVフォンをサンドラから受けたのは、4年来の付き合いの中で今回が3度目である。

1度目は初対面から1年が経とうとする夏のこと。

蒸し暑い夜だった。

衛星都市の気候は気象局によって制御されているが、地球環境とあまりずらさないようにするため、時に不快と感じる環境ですら故意に再現する。

学生専用の住居複合体コンプレックスの一室で、ハルジが怠惰な空調設備に代って夜風を入れようと窓を開け放つていると、フォンが鳴った。

通話ユニットを取るとサンドラだった。

その頃には二人は互いにフォンのやり取りをしていたので、別に珍しくはなかった。真夜中という時間も不思議ではなかった。実験を終えて部屋へ戻るとそのぐらいの時間になることは、よくあった。音声限定だという以外は、普段と変わらないフォンだった。

サンドラの最初の一声は、いつものように共同実験者パートナーと上手いっついていないという悩みの告白から始まった。

彼女のパートナーは閉鎖的思想を持つ東洋人エイジャンだった。彼は、衛星都市で少数である太平洋人オセアニア人に一般に根拠のない差別意識を持っており、太平洋人を酷く軽蔑していたのである。

特にサンドラに対しては彼女の才能への嫉妬もあり、傍目からも辛く当たっているように見えた。が、サンドラが気にかけていないかのように明るく振る舞っていたので、ラボの人間のほとんどはその深刻さに気づいていなかった。

周りに気づかせないぐらいにサンドラの演技は良く出来ていたとも言えるし、ラボ入りを選ぶほどの一つの才能が突出している人間は他人の感情に鈍いのだとも言えた。

だが、気づいてはいるのだが、自分が手を貸すことでもないと思

えないふりを決めこんでいる者が一番多いのではないかとハルジは思っていた。

決して責められることではない。誰彼ともなく救いの手をさしのべることはないのだ。

が、それにしても無関心すぎる。

ハルジも、それほど人に偉そうには言えない。サンドラからちよくちよく相談を受けていたので深刻さを知っていただけなのだから。相談されてほおっておけるほど無神経ではなかったが、ハルジの性格ではこうやってサンドラの愚痴を聞いて自分が思っていることを彼女に伝え、彼女が最悪の選択をしないように力づけてやるぐらいしか出来ないのだ。

サンドラが自分を相談相手に選んだ以上、彼女が最も望んでいるのはそういうことだと思うようにしていた。そうでなければ救いがない。

前向きに愚痴めいたことをひとしきり語った後、サンドラはお決まりの台詞を吐いた。

「あたしは自分が太洋州人だつてことに誇りを持つてるから。こんな不当な差別には決して屈しない。戦い抜いてみせるわ」

喋り続けた後なので、一人称が崩れて「私」から「あたし」になっていた。こういうところにムキになるのが年齢相応で、何処となくサンドラを微笑ましく思ってしまうのが常のハルジだったのだが、その日は違っていた。

言い方に奇妙な真剣さと自分に言い聞かせるような痛々しい調子が含まれていたので、ハルジは不安になってしまったのである。

通話ユニットを片手に持ったまま窓辺に歩いて行き、開けていた窓を閉めるとハルジは思い切つて聞いてみた。

「サンドラが、自分が太洋州人だということに誇りを持つのは良いと思う。俺には誇りを持つることなんか一つもないから、うらやましいくらいだよ。だけど、それとこれとは話が違わないかな」

「どづいこと？」

フォンの向こうから噛みつくようにサンドラは言った。

ハルジは努めて落ち着いた口調で続ける。

「俺たち研究生の役目は、研究員から与えられた実験を確実に速やかにこなすこと。そのためにはパートナーとの人間関係を円滑にすること。こういうことを言うとき悲しくなるけど、人間ってというのは相性があって、上手くいかない人とはどうやっても上手くいかない。そういう時は、お互いの関係を事務的なものに留めて立ち入らないようにする。それが世の中を渡っていく方法の一つじゃないかな」

「あたし、彼に立ち入ってなんかいない」

「いいや、立ち入っているよ。彼の太洋州人に対する感情を改めようとしている」

「……うん、まあ。でも……」

静かに、だが断固としてハルジはサンドラの言葉を遮る。

「でも、と君は言うけれど、彼だって根拠なしに太洋州人に悪い印象を持った訳じゃないと思う。理由があるんだよ、きっと。それに今までそうして生きてきたんだ。そう簡単に態度を改めるなんてできやしない。できるなら、もう、そうしているはずだよ」

実際、ハルジはサンドラのパートナーからそんな話を聞いていた。言ってしまうえば、父親の後妻である太洋州人の義母から幼少時に酷い虐待を受けたということだが、一言で片づけられるほど彼の心の傷は浅くはないようだった。

「サンドラだって、人にどうしても譲れないものはあるだろう？」

「だけど、それはあたしが負けを認めたってことじゃない？」

「勝ちとか負けとかの単純な問題じゃないよ。上手く言えないけど視野が狭いんじゃないかな。サンドラはもっと聡いはずなんだから自分でよく考えることをすすめる」

サンドラの優越感をくすぐって頭を冷やそうとしたのではない。

ハルジは本気でサンドラの才能を認めていたので、こういうことが当然のように言えるのだ。

もし小細工をしたのなら、サンドラはすぐ見破って機嫌を損ねてしまう。

ハルジの飾らないやり取りは、サンドラの高ぶった気持ちを鎮めることができた。

「つまり、彼の太洋州人のイメージに口出しするなってこと？」

「もう少し穏やかな方法があるはずだよ。色々やってみて駄目だったら パートナー解消願いを室長に出せばいい。でも、それをする前に自分にできることはやった方が良く」

「うん、判った……と思う」

先程より幾分か明るい声が返ってきたので、ハルジはほっとした。

「それにしても……」

と言いかけて、ハルジは慌てて口をつぐむ。

「何？」

「いや、いいよ」

ハルジは自分が言いかけたことこそが、サンドラにひどく立ち入ることだと気づいた。

いくら親しい間柄とは言え、ハルジには失礼に思えたので言葉を飲み込んだのだ。が、サンドラはハルジの言葉の端から彼が口にしたかけたことをつかんでいた。

「どうして私が太洋州人にこんなに拘っているんだろう、 って思っているでしょ」

「けっこう思っていたりする」

妙な言い回しで、気にしていないから、というニュアンスをハルジはサンドラに伝えたつもりだった。

人が拘っていることには、他人が触れてはならない、その人にとつてとても大切なものがしばしば含まれている。そこに判っていて自分から入り込むほど、ハルジは無神経ではなかった。

そのちよつとした気遣いもサンドラは感じ取ったようだった。

「いいよ、教えてあげる。私の秘密」

サンドラはなめらかに続けた。

「私ね、養女なんだ」

episode 2 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月30日です。

「本当の両親は片方が東洋人エイジャンみたい。でも私、今の太平洋人オセアニアンの両親を愛しているから。だから太平洋人であることに誇りを持っているのよ」

「それを知ったのはいつ頃？」

サンドラは何でもないとすらすらと答える。

「スクールに入った年だったから、6歳の時。偶然、知ってしまった。両親……育てのね、には聞けなかった。隠したがっていたのが判っちゃったから」

出生にまつわる真実は、明かすタイミングが悪いと後々酷いトラウマになってしまうことがあるが、察するにサンドラの場合にはそれほど悪いタイミングではなかったらしい。ショックが全くなかった訳でもないだろうが。

「でも、本当の両親のことが知りたくて。25歳になれば自分で調べられるってことは知っていたけど待ち切れなかった。だから、うんと勉強して分子遺伝学ラボに入ったの」

分子遺伝学ラボにはDNAトレーサーという装置がある。DNA鑑定に用いられる他、研究員になってIDさえ取得すれば、当局の膨大なDNAバンクにアクセスできる。

対象者の承諾さえあれば、そのDNAが何者から受け継がれたのか、つまり生物学上の親を調べることができる。もちろん自分のDNAなら自分が承諾すれば良いのだから、調べるのは容易い。

「飛び級してラボに入れば、うまくいけば18歳で調べられるじゃない？」

研究員になるためには最低3年間は研究生として学ばなければならぬ。

「それじゃ、サンドラは研究員になるんだ」

「うん、そのつもり。ハルは？」

「働くよ、奨学金返さなきゃならないから。そうだ、サンドラにも俺の秘密、教えておこうか」

後から考えると、何故、自分がそんなことを口にしたのかとハルジは首を傾げたくなる。たぶん、秘密をサンドラから一方的に聞かされるのではなく、分かち合いたかったのだろう。

無言の中に、話したくないなら無理をして話さなくてもいい、という雰囲気を感じられた。

ハルジは緊張の為に乾いてくる唇を湿らして、口を開いた。

「俺、孤児なんだ。15歳の時、両親が死んでしまったから」

「……知らなかった」

「あんまり人に言うことじゃない、こんなこと。自分から言ったのは初めてだと思う」

「実を言うと、私も初めてだったりして。育ての親も私がこのことに気づいているって知らないのよ」

少しの間、奇妙な沈黙が流れた。奇妙だが互いに居心地の悪さを感じるものではない。むしろ逆だ。

自分がそれを望んだのにもかかわらずハルジは、この時間を打ち切らなければならぬ、と強く思った。

こういう時間を幾度も過ごしたら二人は友人でなくなってしまう。

そんな予感があった。

どういう形であれ、ハルジが友人としてのサンドラを失うのは耐え難いことだ。

「……ま、人には秘密の一つや二つはあるってこと」

自分たちが特別な人間ではない、ということ強調するように言い含める。

自分たちが特別ななどという妄想とも言える感覚は例えば、他人を前に言い放てる程に肥大してしまっただら最期だとハルジは思う。そんな人間は社会の中で生きていく資格はない。

社会が、他人が、認めないだろう。排除されてしかるべき行為だ。しかし、それには甘い響きが伴う。同じ意識を持つ者を強く結び

つける。自分たち自身に酔えるのだ。

ハルジは、自分たちは周りと違うという感覚で人との繋がりを強めたくなかった。きっかけとしては許容するが、それだけで築いた繋がりは必ず崩壊する。

だからこそ、サンドラとの繋がりをそういうものに頼るのは絶対に避けたかった。

それに本当に特別な　大部分の人と違うものを持つ者は、そういうことは口にしない。

ハルジはそれを知っていた。

「パートナーのことは頑張りな」

咳払いをすると、ハルジは当てずっぽうではなく、ある程度の根拠からサンドラを励ます。

「頑張つていれば、そのうち、『いいこと』もあるよ、きつと」

「判った。ありがとう、ハル」

サンドラはいつもの元気を取り戻していた。通話ユニットの向こうのちょっとはにかむような笑顔が目に見えるようだ。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

決まり文句のようになっていた挨拶をかわして、フォンを切る。

その直後、サンドラの研究を担当する磯崎という名の研究員から、ハルジはフォンを受け取った。彼はハルジと同じ年で既に研究員だった。彼こそがサンドラの前に15歳でラボ入りした秀才である。

彼からは何度かサンドラのこととフォンをもらっていた。

磯崎はサンドラに気がついて心を砕いているようだった。

ハルジがサンドラを励ました根拠が彼である。ハルジ以外にも自分を気にかけてくれている人がいたと知ったら、サンドラはどんなに心強いだろう。

「彼女、君になら話していると思っただ」

彼のこの言葉は、ラボ内で他のメンバーからハルジとサンドラがどのように見られているかを端的に表わしていた。

互いにいちばん心を許せる仲。

だが、二人の態度がさっぱりとしていたので、その関係にそれ以上の感情があると疑う者は誰一人としていなかった。

ハルジはサンドラに相談されなければ、彼女が人間関係で悩んでいることは判らなかつただろうから、それなしにこのことに気づいた研究員という職業の人は、それだけ研究生に注意を払うものだと感心していた。

が、磯崎が注意を払っていたのは研究生ではなく、サンドラ・フイオルという一女性だったのだと気づいたのは少し経ってからだった。

午後も2時近くに約束した訳でもなく食堂で一緒になったサンドラの口から、ハルジは直接聞いた。

「私、磯崎さんとお付き合いますかもしれない」

「磯崎さんって、磯崎研究員のこと？」

「そう。告白、だと思っけど………された」

「返事は？」

「まだ。でも、なんか私も磯崎さんのこと、ずっと好きだったみたい」

「なら、いいんじゃない」

「……うん」

向かいに座るサンドラのかすかな笑みが急に遠くなる。

昼下がりの閑散とした食堂の白いテーブルがやけに光って見えた。ハルジの体の中に眩しい光が射ってきて、心の何処かがゆっくりと麻痺していく。

ハルジがこの時感じていたのは、後から考えれば喪失感だった。友人に大切な人ができてその分、自分と接してくれる時間が減るだろうという想いだっただろう。

その友人が、たまたま彼にとって初めての、そしてその時唯一の女友達だったから、激しい感情を味わう羽目になったのだ、と。

episode 3 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月13日です。

サンドラからの2度目の音声限定フォンは、1か月前のことだ。

「私、今、提供者と被提供者ドナー
レシヒエントの研究をしているの」

被提供者はMCの症状が酷く、通称、メディスンと呼ばれる薬無しでは生きていけない人々のことである。

問題はそのメディスンにあつて、これがある特殊な遺伝子を持つ人々の血液からしか抽出できないのだ。

その特殊な遺伝子を持つ人々が提供者である。

しかし提供者の数があまりに少ないので、一度、提供者と判明した人は、某所 一説にはそこは医療施設が集中する衛星都市、コロナーにあると言われている に収容され、一生血液を採取される生活を送る。

被提供者の中に、稀にだが賜物ギフトと呼ばれる超感覚的知覚（E・S・P）を持つ人間が出現する。

月などの資源採掘の際に絶大な能力を発揮する金属探査者メタルダウザー。

犯罪捜査に欠かせない思念追尾者・情緒感应者メモリーシークエンサー
エンパス。

治安維持に活躍する予兆感知者などサインファインダー。

彼らなしで社会生活を営むことが出来なくなりつつある衛星都市の現状もあり、汎衛星都市連盟当局ではこの問題に手を焼いていると言つ。

どちらにも人権はあり、どちらか一方を優遇することはできないというのが建前だったが、どちらか一方を優遇すれば、提供者、被提供者、衛星都市市民の寄生関係ともいえるバランスが崩れて衛星都市は事実上、崩壊するだろう。

提供者と被提供者の問題は歴史は浅いが、東洋人エイジャンと太洋州人オセアニアの問題よりずっと深刻だった。

提供者や被提供者が生み出された原因は、MCウイルスがもたらした遺伝子の歪み構造にあり、それが解析されつつあるという学術

的な話から、美味しい料理を出すパブを見つけたから二人で一緒に行ってみるといい（もう一人は、この頃にはすっかりハルジの恋人と呼べるようになっていたカレリアのことなのだが）ということまで一通り話すと、サンドラは言った。

「あだし、今日、磯崎さんにプロポーズされちゃった」

「受けた、よな」

言葉とは裏腹にそんな筈はないという確信がハルジにはあった。もし受けたのなら、こんな回りくどい言い方はしないだろう。

思った通りの返事をサンドラは口にした。

「まだ。心配事が一つあって、それを片づけてからにしようと思つて。……ハルはカレリアさんに自分のご両親のこと、話した？」

思わぬ所に話の矛先が向く。お陰でかえって変に意識することなくハルジは答えることができた。

「と言うかね、カレリアは知ってるんだ。彼女とは孤児の集まりで知り合ったから」

「そっ……か」

疑問というよりは確認の為にハルジは聞いた。

「サンドラ、磯崎氏に話してないの？……その、ご両親のこと」

気まずくなるのを恐れてハルジの歯切れが悪くなる。しかしサンドラは、そんなことを気にかけることは全くないようだ。

「実はね。話さなきゃってずっと思ってたんだけど、タイミングを逸したっていつの？ それでここまで来ちゃったよ」

「いつかは話さなきゃ」

強い調子でハルジは言った。サンドラと磯崎ほどの親密な間柄なら、そういうことは、はっきりしておくべきだという思いからだっ

た。
「そんなのハルに言われるまでもないってば。でもね、早くても来週かな。来週、IDもらえるから。そうしたらDNAトレーサーを使えるの。それから」

「絶対に話さない」と

しつこく念を押しすぎたせいだろうか。サンドラがハルジに反撃した。

「うん。それより、プロポーズされるっていいものよ。ハルも早くカレリアさんにプロポーズしてあげたら？」

ハルジは一瞬、言葉に詰まってしまった。

「……うすうすは考えているんだけど。俺たちにはまだ早いかな、もう少し収入が多くなってから本格的に考えるよ」

「手遅れにならないように」

「ご忠告、ありがたく承ります」

あれほど想っていた磯崎と結婚できないなどと口走るとは。

ハルジには判った。何か 自分の根本を崩す程の何かが、サンドラの身に降りかかったのだ。

あれから一か月たった。サンドラがこんなフォンをかけてきた理由は、DNAトレーサーの結果にあるであろうことは容易に想像がつく。

だが、それをハルジから口にはしない。飽くまでも彼女の口から聞かなければ。

「……サンドラ。話せることだけでいいから話して欲しい。おこがましいけど力になりたいと思うんだ。話してもらえないと、それもできない」

実際にはどうであれ、サンドラの心の中では、磯崎は役に立てないことになっている。ハルジがどうにかするしかないだろうし、また、彼はどうにかしたいとも思っていた。

「うん、判ってるんだけど自分でもよく整理がついてなくて。でも判ってるの。ただ、突然すぎるだけ」

サンドラの声は揺れている。

「落ち着いて。最初から話してみるといい」

「うん」

2 回程、解読不能な声を出しかけて、3 回目にサンドラはやっと

喋り始めた。

「あたし、もらったIDで自分のDNAを調べてみたの。やっぱり片親は東洋人。父親よ。名前は周東チカシ。母は太洋州人。周東レナ。この母が、育ての父の妹に当たる人だった」

「覚えたての言語を話すように短文を重ねていくサンドラ。動揺していることの表われだ。」

「サンドラは伯父さん夫婦に引き取られたんだね」

「そうみたい。それがね、両親のDNA情報が封鎖されていたの。準一級機密」

「準一級……！」

機密の等級の高さに驚いたというのもあったが、その等級がハルジにとって耳慣れたものであって最悪の予感がしたから、という方が驚きの声を上げた主な理由だった。

「研究員IDで注釈を見ることができた。あるプロジェクトに参加しているため機密扱い、なんだって。プロジェクトについては、詳しくはハルにも言えないんだけど」

「エンジェル・フィールド計画のことだろ」

「え！？」

今度はサンドラが驚かされる番だった。

「あたしだってかなり特別な手続きをしてから判ったのに……」

episode 4 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月27日です。

ハルジはTVフォンのモニターが切られていることに感謝した。今、自分がいかに醜い表情をしているかを知ってはいたが、その表情は消せない。それが出来るほどハルジの心の傷はまだ乾いていなかった。

そんな情けない自分の姿をサンドラに見られなくて済むのはハルジにとって、とてもありがたかった。

サンドラの前ではそういう意味でいつも強がっていたい。

ハルジは声にだけは激しい感情が出ないように、細心の注意を払いながら言葉を紡ぐ。

「地球のMCウィルス汚染地区、その中でも日本に都市を作り、提供者を集めて住ませる。提供者^{ドナー}同志の婚姻によって血を濃くし、提供者の数を増やして安定的にメディスンを供給するという……」
サンドラ、よく調べられたな。AFプロジェクトそのものは超一級機密なのに」

このような人権を無視した計画が当局によって進められていることなど、公には出来ない。

超一級機密にされる所以はそこにあった。

「あたしにはそれを知る権利があるの。両親が共に提供者だから。AFプロジェクトに賛同した提供者…… エンジェルだから」

エンジェルという単語だけで、ハルジにはサンドラが当局の作成した文書からこの知識を得たことが判った。

「サンドラ、彼らは自分たちをエンジェルなんて言わない。単に地球に住む提供者……アーシアンドナーって言うんだ。エンジェルというのは当局が哀れんでつけてくれた美称だからね」

穏やかな物言いを常とするハルジとしては、かなり痛烈な皮肉だ。「両親が提供者の場合、その子供が提供者である確率は8割なんだってね」

「そう。その8割から俺はもれたんだ」

ハルジの声が突如として真剣味を帯びる。

「……俺はエンジェル・フィールドで生まれた。あそこに住めるのは、提供者か技術者だけなんだ。子供は提供者じゃなくても15歳までは居住を許される。衛星都市に移っても両親がアーシアンドナーだから、当局から無尽蔵の資金援助が受けられるんだ。本当の意味で生活には困らない。だけど、俺はそれに甘えなくなかったから奨学金を取ったし、こうやって自分で稼いでいる」

「そして、エンジェル・フィールドに戻るために技術者になることを選んだのね」

ハルジはサンドラに答える代わりに別のことを口にした。

「前、サンドラに言ったのは嘘なんだ。両親は生きている。会うことは出来ないけど。どちらにしてもサンドラに嘘をついていたことには変わらない。謝るよ。本当にごめん」

「いいよ別に。機密で喋れなかったんでしょ」

明るい調子だったサンドラの声に、一瞬後に堅い響きが混じる。

「……カレリアさんには、本当のことを話してあるのね」

「カレリアも俺と同じ境遇だから、改めて話すまでもなかった」

ハルジの胸に、サンドラに対する後ろめたさが湧き起こってくる。

「そう……」

短く応えるとサンドラはいったん口ごもり、呟くように続ける。

「今なら判るの。あたしが小さい頃、友達に引きずられて遊び半分でDNA検査に行こうとしたのを、親が必死になって止めたのが」

次の言葉はハルジにも予想できた。最も聞きたくなかったことなのだが。

「ハル、私も提供者なの。自分でしたDNA検査の結果だから間違いない。あたし、地球に……エンジェル・フィールドに行く。そうしたら、たくさんの人の命を救える。そういうことが出来るんだから、そうした方がいいよね」

「それでサンドラは満足なのか」

ハルジ自身、驚いてしまうほどの叱るような強い語勢に、サンドラは答えない。

「人が自分の能力を生かすのは、いいことだよ。だけどそれが稀な能力の場合、本人の意志にかかわらず選択肢が狭められたりする」

「だってエンジェル・フィールドに行けば、ありあまるくらいの援助金が出るんでしょ？ 育ての親にだって恩返しができるし、生みの両親にも会ってみたいし……」

「そうされたくないからこそ、君の育てのご両親はDNA検査を受けさせなかったんじゃないのか？ サンドラ、常識で決まる取るべき道じゃない。君はどうしたいんだ、君は？ 君が、君自身で選ぶんだ。そうじゃないと絶対に後悔するぞ」

ハルジにしては珍しくきつい物言이었다。絶対に、などという脅迫めいた言い方はするものではない。特に受け取り側の精神が不安定な場合には。

言葉が不吉な暗示となって受け取り側を縛り、錯乱に拍車をかけるだけだ。

そんなことは身に染みて判っていたが、ハルジも動揺していた。だが当然ながら、サンドラの動揺はハルジを上回っている。

「怖い、あたし。だって磯崎さんをあきらめようとしているもの」「磯崎氏は優秀な技術者だ。彼自身が志願すればエンジェル・フィールドに行けるほどのね。心配ない。彼とは離れなくてもいいんだ。磯崎氏なら君と一緒にいくことを選ぶよ」

「それが怖い。あたしの選んだ道に彼を巻き込んでしまうのが怖い。あたしそこまで自信ない。そこまで磯崎さんの人生を曲げる権利なんてない」

サンドラは、もはや金切り声になっていた。感情の波がそのまま声に表れる。

「いいのか？ エンジェル・フィールドに行ったら二度とこっちには戻れない。あそこに行くというのは、そういうことなんだ。磯崎氏と一生別れることになる、会えなくなるんだぞ。そこまで知って

「言っているのか？」

しばらくの沈黙。

そして、通話ユニットの向こうでサンドラの気配が変わったのをハルジは感じた。普通に考えればありえないのだが、この瞬間、ハルジには目の前に彼女がいる時と同じくらい、それを察することができた。

事実、耳で聞き取れたのはサンドラがかすかに吐いたため息だけだった。

「それよりハル、あたしと一緒にエンジェル・フィールドに行こう」

episode 5 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の12月11日です。

「ね？ハルは技術者だしエンジニア・フィールド生まれなんだから志願すれば行けるよ、きつと。ね、あたしと一緒にいこう」

先程まで漂っていた切迫感は一瞬にして消え去った。エンジニア・フィールドに行く、とすっかり決めていたらしいサンドラの話しぶりにハルジは疑問を覚えはするが、サンドラに合わせて明るい調子で言う。

「サンドラ、判ってて言うてるよね？ 出来ないんだ。カレリアが……売れないシンガーのカレリアには、エンジニア・フィールドに住む資格がない」

「お見通しなのね。もちろん、そんなの判ってるってば。原因がカレリアさんにあるだろうってことぐらい。冗談よ、冗談。本気で取らないで」

ハルジとサンドラはフォン越しに微笑みあった。

サンドラに必要なだったのはこれだったのだ、とハルジはしみじみと思う。

確かにこの役は磯崎には無理だ。他の誰にだって無理だ。ハルジにしか出来ない。

磯崎なら恋人という間柄にあるが故に、こんなことを言われたらサンドラと共に行くしかない。縛られる自由もあるのだ。

それが磯崎とサンドラにとっては当然だ。

しかし、例えそれが磯崎の本心であっても、彼がついてきてくれることにどんなにサンドラが嬉しさを感じたとしても、彼女の中の磯崎を巻き込んでしまったのではないかという重みは消せない。

その重みを背負うよりサンドラは磯崎から離れていくことを選んだ。

友人であるハルジなら、そこに縛られない。

ましてやハルジには彼を縛るべき人が他にいない。

サンドラが欲しかったのは、彼女を本当に心配していながら自分の生き方を曲げること無く、深刻さを承知しながら同情なしに冗談をかわせる相手だったのだ。

彼女がその相手に自分を選んでくれ、様々な偶然の働きがあり、ここまで意識しないで役割を果たせたことをハルジはただ、良かった、と思った。

考えてみれば、ハルジはサンドラにこういう役をふってくれることを最初から望んでいたのかもしれない。

そしていつか二人が離れた時に、お互いの存在ではなく、共有した時間で交わした言葉や抱いた感情が、胸に宿る想いが、時間も距離も超えて萎えてしまいそうになる、互いの生きていこうとする力を支えていけるように、と。

笑いの漣が収まると、ハルジはそっと囁くように問う。

「……磯崎氏のことは？」

「ん……プロポーズは断つとく。それから『自分を見つめ直すため』旅に出ることにする。いつ帰って来られる旅か判らないから、新しい人をみつけておいてねって言うておく」

「プロポーズを断るにはずいぶん曖昧な理由だね。彼が納得するかどうか」

「納得も何も来週には私、エンジェル・フィールドに旅立つのよ。手続きはとづくに終わってるもの」

ハルジは目眩を感じた。

サンドラは相談はするが、その時にはとづくに心を決めていたり行動した後だったりすることが度々あった。

おそらく磯崎だったら、彼女が今回のように意図的に秘密にしようとしない限りは、彼女のちょっとした仕草から敏感に察知して、彼女を止めようとするし、止められるだろう。

ハルジでは感じ取るのも上手いとは言い難いし、サンドラを止められない。

そこまで彼女に踏み込んでしまうのに抵抗を覚えるし、自分では

サンドラの心を急には変えられないと思う。

サンドラもハルジの言動で自分の行動を急に変える気はないだろう。

だからこそ、ハルジとサンドラは判り合えながらも友人どまりの関係なのだし、感情表現の大部分を会話に頼るからこそ、誰よりも近い所にいるという確信を互いに持てるのだ。

「また突然な……考える時間ぐらい取っておかないと」

「言っても無駄だって、判ってるよね？」

「もちろん」

そろそろ話が終わりに近づいてきているのをハルジは感じていた。自分から話を切り出すと、大した話題もないのに引き止めてしまいたいそうになる。それが怖くて自然とハルジの沈黙が増えていく。

ふいに、何を思ったかサンドラが話を切り換えた。

「あたしねー、映像切ったフォンって好き」

「え？」

あまりの唐突さにハルジはついていけなかった。

サンドラは突然、話の核心をぶつけるような、こんな話し方をよくする。そんなところも、ハルジはとても好ましく思っていた。

「昔のフォンって音声だけだったんだってね。それって正解。顔が見えると駄目よ。相手のこと判った、って変に安心しちゃうもん。直接会わない限り判りっこないのに。賢い人にとっては何、声だけだったら色々想像できるし、その分相手のことも思いやれるし、強がるのも顔が見える時より楽し、いいことづくめだと思う。TVフォンを作った人には申し訳ないけど」

「そうだね」

短い、サンドラのユニークな着眼点と鋭い洞察力に感じ入った、それは最高の賛辞のあいづちだ。

話がまた一転する。それこそ話題が尽きてきた証拠なのだが。

「ハル、カレリアさんからのフォン待ちだったでしょ？」

「あ？……そう言えば」

ハルジ自身も忘れていたことをサンドラは言い当てる。

軽い驚きの声を上げるハルジに、サンドラは名探偵よろしく解説を始めた。

「こんな変な時間にフォンしてすぐ取ってもらえるなんて理由、恋人からのフォン待ちぐらいしかないじゃない。それともなあに、たまたま通話ユニットの上に手を乗せていたとでも言つつもり？」

「言わないけど」

ハルジにしては珍しく拗ねた口調で返す。

表面的には決して甘えではなく、ふざけているのを装って。

「ずいぶん不満そうなこと。はいはい、いい加減判ってくれていると思っただけど、あたしは知っててやってるの。それぐらい判るでしょ？」

「まあね」

「だから、そろそろ切るね」

今まで幾度となく繰り返されたいつもの軽口は、今日はサンドラの一言で終わらせられてしまう。

そしてこの時間は、永久に失われるのだ。

「うん」

ハルジの返事はいつになく短い。

「それじゃ……」

と言いかけて、サンドラは付け加えるように言う。

「そうそう。本当は見送りに来てもらおうと思っただけど、地球に来る連絡船、いつ出るか教えてもらえなかったの。指示があるまでお待ち下さい、だって。来週の今日、あ、もう昨日か……に、このグラウクスを発つのは決まっているんだけど」

サンドラはハルジに口を挟まれるのを嫌っているかのように、まくしたてる。

「これから引越しか手続きとかプロポーズ断ったりとか、色々忙しいと思う。フォンをかけられるのも、今日が最後かも」

形は追伸だが、サンドラはこれをハルジに伝えたかったのだろう。

それが痛いほど判っているながらもなお、ハルジには素っ気ない応答しか出来ない。

「そう……だね」

「今までありがとう」

「何もしてないよ。俺は」

どんな気持ちを含めて話せば良いか見当もつかないハルジには、無表情な声でそう言うしかなかった。

「いいの。あたしは知っているから。ハルはあたしをただの一度も子供扱いしなかったのに、いつも自分は年上だって意識してくれただでしょ。そういうのは何もしてないなんて言わない」

それこそが、ハルジがサンドラにしていた唯一の気遣いだった。今まで伝わっていないのでは、と思っただけに、彼女に最後にそう言ってもらえたのは本当に嬉しかった。

だが、今のハルジはその喜びをサンドラにうまく伝えられない。

「サンドラがそう言うのなら、少なくとも君の中では真実だ」

フォンの向こうでサンドラは小さな笑みを浮かべていた。ハルジのそんな繊細な感情表現の仕方をサンドラは良く知っていた。だからこそ、互いに大切な友人であり続けることを選んだのだから。

「判ってきたじゃない、ようやく。……それじゃハル、おやすみなさい」

「おやすみ、サンドラ」

そうしてフォンはサンドラから切れた。

ハルジは通話ユニットをおくの何となく躊躇った。

が、それではカレリアからのフォンを受けられないのだという事実によろやく気がつき、通話ユニットを置いた。

episode 6 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の12月25日です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335x/>

エンジェル・フィールド

2011年12月11日01時52分発行